

芸術家のジレンマ

——理想と現実の “The Artist of the Beautiful” ——

西 光 希 翔

Synopsis: In “The Artist of the Beautiful”, Nathaniel Hawthorne portrays an ideal artist, Owen Warland, who tries to create the beautiful in a butterfly made up of parts of watches, and who finally succeeds. Owen thus surely embodies the ideal artist Hawthorne imagines. However, it should be noted that Owen faces quotidian problems; he has to work as a watchmaker to earn money, and nobody regards his butterfly as significant. Considered in this light, it is reasonable to assume that what Hawthorne tries to depict in the story of Owen is the harsh reality an artist encounters. This paper aims to elucidate the dilemma of an artist, which Hawthorne delineates in his portrait of Owen.

序

Nathaniel Hawthorne の “The Artist of the Beautiful” (1844) では、理想の芸術家像が提示されている。本作品は美を追求する時計職人 Owen Warland が、美のアイデアに達するほどの高みへと昇る過程を描いている。思いを寄せる Annie Hovenden のために、Owen は機械仕掛けの蝶を作りあげる。Owen は紆余曲折の末、Annie のために蝶を完成させる。しかしかなりの年月が経っていたのだらう、Annie はその間、Owen の近くに住む鍛冶屋の Robert Danforth と結婚し、男の赤ん坊を出産する。Owen が長い年月を費やして作り上げた蝶は、この赤ん坊によって粉々に破壊されてしまう。蝶を見る赤ん坊の顔は、Owen の師匠であり、Annie の父である Peter Hovenden と重ねられている。Owen と Peter は馬が合わない。Peter は Owen の才能を認めつつも、一心不乱に取り組んでいる機械の蝶の制作を理解できず、見下してすらいる。蝶を破壊する際の赤ん坊の様子は、

Owen の労苦を嘲笑う Peter の生き写しのようである。

赤ん坊に蝶を破壊された時の Owen の描写には、ある種の勝利宣言なされている。“When the artist rose high enough to achieve the beautiful, the symbol by which he made it perceptible to mortal senses became of little value in his eyes while his spirit possessed itself in the enjoyment of the reality” (“The Artist of the Beautiful” 376)。この直前に “He had caught a far other butterfly than this” (376) と綴られている通り、Owen は蝶に象徴される美の本質を獲得している。孤独な芸術家が世間の声に翻弄されながらも、最後には孤高の芸術家として美に達するほどの高みへと昇る。きわめてロマンチックな、理想的な芸術家の生き方である。だが、本作品の根底には Owen が生きている現実世界があり、そこから決して離れることが出来ない Owen の姿を垣間見ることが出来る。寧ろ、芸術家が生きる現実に対する Hawthorne のまなざしこそが、この物語の骨格となっているように思われる。

Michael T. Gilmore は *American Romanticism and the Marketplace* において、アメリカン・ルネッサンス期の作家たちが抱えていた、芸術家としてのジレンマを明るみに出している。その中で Gilmore は “Rappaccini’s Daughter” (1844) を取り上げ、Hawthorne がこの作品において、自らが置かれていた作家としての苦境を描いていると指摘する。“Rappaccini’s Daughter” は科学に主眼を置いているように見える作品なだけに、この指摘は独創的であるし、説得力もある。しかし Gilmore は、現実世界における芸術家のジレンマが描かれている “The Artist of the Beautiful” についてはタイトルを挙げるに留めている。そこで本論では他の作品と共に、“The Artist of the Beautiful” を考察し、Hawthorne が理想の芸術家像の中に、逆説的に芸術家が直面する現実を描いている点を明らかにしたい。

1. 自然と美

タイトルにある「美の芸術家」とは、直接的には Owen を指示している

が、この美とはどのようなものを指すのか。まずはこの点を問うてみたい。Owen の求める美は自然と強く結びついている。作品中には Owen が幼少の頃に “the beautiful movements of Nature” に惹かれていた、とある (356)。大人になってからも自然に対する感情は変わっていない。Owen はしばしば、森の中で蝶を追いかけるが、その様は次のように描写される。“The chase of butterflies was an apt emblem of the ideal pursuit in which he had spent so many golden hours ; but would the beautiful idea ever be yielded to his hand like the butterfly that symbolized it?” (362)。Owen は森の中、つまり自然において、自分の求める美を探している。Owen が時間をかけて作っている蝶は、自然にある美の概念の象徴なのだ。

Owen と Hawthorne の自然に対するまなざしは類似している。本作品が収録された *Mosses from an Old Manse* (1846) の巻頭には、“The Old Manse” と題されたエッセイが掲載されている。このエッセイは Hawthorne が Sophia と結婚し、新居に選んだ旧牧師館について書かれたものだ。エッセイの語り手は読者を旧牧師館へと誘っていく。それは門から始まり、館内、Ralph Wald Emerson が *Nature* (1836) を書いた書斎を経て、Concord 川の畔へと続いていく。そこで語り手は自然を細かく観察している。白い水連の美しさと香りを生み出しているのが、黒い泥であること、そして同じ泥から黄色の百合が、こちらは不快な匂いを放っていることに気付く。またそれを人間の世界に当てはめている (“The Old Manse” 6)。“The Old Manse” の語り手は自然の中の美について次のように語る。“Each tree and rock and every blade of grass is distinctly imaged, and, however unsightly in reality, assumes ideal beauty in the reflection” (“The Old Manse” 6)。自然から理想の美を想像しているのが分かる。

森の中で自然を観察し、美を蝶という形で具現化しようとする Owen と、自然から理想の美を想像しようとする “The Old Manse” の語り手に類似性があるのは間違いない。Hawthorne がしばしば旧牧師館の近くにある森を歩いていたことは事実であり、そこで様々な物語が想像されただろう。

Owen も同様に、周囲の人間から狂ってしまったと思われる程の熱意をもって、森の中で蝶を探しているのである。後述するが、“The Artist of the Beautiful” は 1844 年に書かれており、Hawthorne が旧牧師館に住んでいる時期と重なる。Hawthorne の自然へのまなざしが、Owen の観察眼に反映されていると言えよう。

Owen は機械仕掛けの蝶を、つまり美を完成させる。労苦の末に作り上げた蝶は、Robert と Annie の子供によって握りつぶされるが、それは Owen にとって大きな問題ではない。“When the artist rose high enough to achieve the beautiful, the symbol by which he made it perceptible to mortal senses became of little value in his eyes while his spirit possessed itself in the enjoyment of the reality” (376)。Owen は回り道をしながらかはあるが、最終的には芸術家として高みに達している。しかし、ここで忘れてはならないのは、Owen が蝶の制作過程において、換言すれば、美に達するほどの高みに昇る過程において、現実世界から完全に離れられているわけではないことだ。Owen の蝶は時計の部品からできている。Owen は機械を解体し、その部品から蝶を作ることはできても、時計の部品や道具を作ることはできない。Owen が思い描く美は、物質を介することでしか可視化できないのである。それは Robert が Owen の鉄床を作っていたという事実にも明確に示されている。また Owen は蝶を届けに来る際、自分の成し遂げたことが理解されないことを知っている。

He knew that the world, and Annie as the representative of the world, whatever praise might be bestowed, could never say the fitting word, nor feel the fitting sentiment which should be the perfect recompense of an artist who, symbolizing a lofty moral by a material trifle—converting what was earthly to spiritual gold,—had won the beautiful into his handiwork. (373-74)

ここで注目すべきなのは、やはり、Owen が美を表現するためには何がしか

の物質を介さなければならない点である。

Robert の鉄床が象徴する通り、Owen の蝶は、“the beautiful” と “the harsh, material world” (364) の間に生まれるのである。本作品では対立が一つのキーワードになっている。Richard Harter Fogle が指摘する通り、最も大きな対立は Owen と社会の対立だ (99)。だが一方で、Owen は何がしかの媒介を用いなければ、自ら生まれてきた理由だとまで断言する蝶作りを完結させることは出来ない。James W. Gargano は、Owen の成功は、彼が孤独の中で成した仕事と同じくらい、社会との関わりに起因していると述べているが (226)、この指摘は恐らく正しい。Owen の思い描く美——機械仕掛けの蝶——は、物質を媒介に表現されたものなのだ。

Owen は作品の最後、蝶を完成させ、Annie たちのもとにそれを届ける。蝶は赤ん坊に破壊されるのだが、Owen は何か別の蝶を捕まえたことが作品の結末で提示されている。眼に見えるものに価値を見出さなくなった Owen は、技術で美を表現する必要がなくなる。そのようにして、自然の美を表現し得る芸術家となったと言えるだろう。

Owen は美へと達することができたことが暗示されるのだが、Owen の美が自然と深い関係にあったことは今一度考えるべき問題だろう。Owen は自然の中にある美を機械仕掛けの蝶で具現化しようと試みるわけだが、その試み自体が矛盾したものではないだろうか。タイトルにもある通り、また自分で呼んでいる通り、Owen は “artist”，芸術家である。Art の語源はラテン語の技術、技能を意味する “ars”，“artis” であり、自然とは相反するものだ。つまり、自然の中の美を機械仕掛けの蝶の中で表現することは、技術や技能と物質を介し、自然を人工物に転化することを意味するのであり、成就することはないのである。

2. 時計と死

本作品を考察する上で、19世紀の産業化されていくアメリカという背景は重要だ。19世紀のアメリカでは、蒸気機関に代表される機械の普及によ

り、人々の生活は一変する。Leo Marx は *The Machine in the Garden* において、アメリカの作家が、安全な場所、隔離された世界、あるいは守られているという安心感を与える場所の平和を乱すものとして、機械を描いてきたと指摘している (31)。本作品中には、そのような機械として、蒸気機関が用いられている。Owen が幼少の頃、彼に機械の原理を直観で理解する力があると思った親族たちが、蒸気機関を見せに連れていく。だが意外なことに、Owen は怪物でも見せられたかのように、顔を青くし、具合を悪くしてしまう (356)。このような Owen の蒸気機関への反応は、Marx の指摘と符合する。ちなみに、*The Machine in the Garden* の第一章は主に Hawthorne について書かれており、Marx は *The American Notebooks* に書かれた、1844 年 7 月 27 日の朝の出来事に注目している。Hawthorne が森の中で静寂を楽しんでいると、突然、蒸気機関の音が轟き、静寂が乱される。Hawthorne は次のように書いている。“There is the whistle of the locomotive—the long shriek, harsh, above all other harshness, for the space of a mile cannot mollify it into harmony” (TAN 248)。蒸気機関の音はまさに、安全な場所、隔離された世界、あるいは守られているという安心感を与える場所の平和を乱すものだとされている。ちなみに、1844 年 7 月 27 日の段階では、Hawthorne はまだ旧牧師館に住んでいる。蒸気機関の音が聞こえてきた時にいた森は、前章であげた “The Old Manse” において言及される森である可能性が高い。つまり、蒸気機関の音を聞いた森と、“The Old Manse” の語り手が自然を観察する森、そして Owen が徘徊する森が、Hawthorne の想像力において、同一のイメージとして作用しているのだ。

森の静寂は蒸気機関という機械によって破られる。自然を感じようとしていた Hawthorne にとり、それは疎ましいものであっただろう。しかし Hawthorne は自然の中で聞こえた、もう一つの機械の音については不快感を示していない。蒸気機関の音が聞こえる直前、Hawthorne は次のような音を耳にしている。“Now we hear the striking of the village-clock, distant, but yet so near that each stroke is distinctly impressed upon the

air. This is a sound that does not disturb the repose of the scene ; it does not break our Sabbath” (TAN 248)。このように Hawthorne は町の時計の音も聞いているが、その音には特に不快感を示さない。恐らく、Hawthorne にとり、時計の音は日常的なものであったということなのだろう。

確かに、この作品が書かれた 19 世紀は、人々の時間に対する認識が大きく変化した時期でもある。Michael O'Malley は 19 世紀において時間は、自然や神に根を持つ現象から、機械すなわち時計にもとづく、言わば勝手に決められた抽象的な量にとって代えられたと指摘している (13)。当初、時間は太陽に大きく依存しており、労働時間も太陽の光に依存していた。だが 1830 年代には労働時間に時計が影響を及ぼし始める。工場が増加され、システム化されていく中で、時計の時間が普及していく。本作品においても時間は重要な役割を果たしている。Owen は美を獲得するまでに、5 年の月日を要する。また、作業が中断される度に、数ヶ月の苦労が無駄になったと繰り返し発言する。何よりも Owen は時計職人であり、時間と深い関係を持っていることが前景化されている。このように、時間が物語の大きな枠組みとなっていることは間違いない。

作品中、Owen が真面目に時計職人としての仕事に取り組む時期がある。Owen の腕は確かで、町の評判になる。“[. . .] Owen Warland was invited by the proper authorities to regulate the clock in the church steeple. [. . .] In a word, the heavy weight upon his spirits kept everything in order, not merely within his own system, but wheresoever the iron accents of the church clock were audible” (360)。町の人々は Owen が修理した時計が刻む時間に沿って、規則ある生活を営むのである。商品取引所の人々や看護師が Owen に感謝している。彼らが労働において、時間を順守しなければならない立場にあるのは言うまでもないだろう。これは O'Malley が記述したエピソードと類似している。1826 年、New Haven の市庁舎に時計が取り付けられる。その時計は秩序と日常生活の分けへだてない規則を象徴的にあらわすことになったと、O'Malley は記している

(40)。先に触れた、Hawthorne が森の中で聞いた時計の音は、このような性質を有するものなのだ¹。Owen が修理した時計に話を戻すと、興味深いのは、Owen が修理した教会の時計が町の時間に秩序を与えていること、もっと言えば、Owen という存在が町の時間に秩序をもたらしていることである。

Hawthorne は当時の時計事情をある程度踏まえ、史実に基づいて作品を書いている。本作品における時計の問題は、しばしば論じられている。鷺津浩子は『時の娘たち』において、本作品が内在している 19 世紀の時計事情を明らかにしている。また松尾裕美子も、時間と近代科学の変化を追いかけながら、本作品を分析している。Hawthorne が Owen に一見すると時間の浪費とも思われるような生き方をさせていることは、時代への批判であると松尾は指摘する (171)。これらの指摘は 19 世紀アメリカの時代背景を考慮に入れつつ、本作品において時計が果たす役割を明らかにしている。しかしながら、これまでの多くの先行研究は次の場面について明確な解釈を提示していない。“It [the window of a small shop] was a projecting window; and on the inside were suspended a variety of watches, pinchbeck, silver, and one or two of gold, all with their faces turned from the street, as if churlishly disinclined to inform the wayfarers what o'clock it was” (354)。これは作品の冒頭、Peter と Annie が Owen の店の前を通りかかった際に窓から見える光景だ。時計が内側に向けられている理由は何であろうか。Fogle はこの場面をとりあげているが、Owen のような社会に順応していない時計職人にふさわしい紹介であると指摘するに留めている (100)。確かにこの指摘は間違いではないだろう。時計屋であれば、見えるように時計を配置したほうが、仕事の依頼がくることは容易に想像できる。また文字盤が見えない時計に、時間を計るという機能はない。引用の後半にある通り、確かに、あたかも時計がつむじ曲がり、自らその実用性を拒絶しているかのようである。

しかし、それではこの場面の謎を十分に考察できていないように思われる。作品中、この内側に向けられた時計については明確な説明は提示されて

いない。そのため、読者は Owen が店の中でしていることから、時計が内側に向けられている理由を判断するしかない。序論で述べた通り、Owen は店の中で機械仕掛けの蝶を作っている。Peter は Owen を訪ねた際、作りかけの蝶を見つける。その時、Peter は次のように言う。“What have we here? Owen! Owen! there is witchcraft in these little chains, and wheels, and paddles” (361)。ここに明かされている通り、Owen の蝶は時計の部品で作られている。恐らく、店にある時計を解体し、その中から適合する部品で蝶を組み立てて作っているのだろう。

時計がたくさん並べてあるのは、恐らく、より多く部品を得るためだ。ならば、何故それらはわざわざ内側に向けて掛けられているのだろうか。恐らく、これらの時計は本来の目的で使われている。つまり時間を計るためにあるのではなかろうか。Owen は蝶を作る際、時間を気にしていたのではないだろうか、ということである。作品中、Owen は何度も、蝶作りを中断され、その度に、集中できなくなる。その時、Owen が口にする言葉は注目すべきである。Robert が Owen に依頼された鉄床を届けに来る時、彼の中に自分と正反対の気質を感じ、それに毒されたと感じる Owen は、次のように口にする。“It is all over—the toil of months, the object of my life. I am ruined!” (359)。作業場を訪れた Peter に作りかけの蝶を見つけられる時、“The leaden thoughts and the despondency that you fling upon me are my clogs, else I should long ago have achieved the task that I was created for” (361) と、Owen はかつての師匠に対して叫ぶ。Annie が蝶を針で突こうとする場面では “That touch has undone the toil of months and the thoughts of a lifetime!” (364) と、口にしてしている。これらのセリフにおいて、Owen が蝶作りを自分の人生の目的としていることは注目に値するだろう。いかに蝶作りが無為なものであると言われたところで、それは Owen にとって人生を懸ける価値のあるものなのである。Owen は Peter に蝶を見つげられた後、ほとんど時計職人としての仕事を辞める。そして森の中を彷徨い、蝶を追い、観察するようになる。語り手はその時の Owen の様子を次のように描写する。“He wasted the sunshine, as people said,

in wandering through the woods and fields and along the banks of streams” (362)。“People”とは、普通に働いている人々だろう。彼らから見れば、Owenは労働できる時間を無為に過ごしている。しかしOwenからすれば、森での徘徊も、自らの人生の目的を完遂するための欠かせない労働なのである。

機械仕掛けの蝶を介して美を表現することを人生の目的とするOwenにとり、いつ完成するかも分からない作業は時間との闘いであったことだろう。Owenに時間を意識させるのは、時計だけではない。身近に時の流れを感じさせる者がある。Peterだ。Peterは“A watchmaker gets his brain puzzled by his wheels within a wheel, or loses his health or the nicety of his eyesight, as was my case; and finds himself, at middle age, or a little after, past labor at his own trade, and fit for nothing else, yet too poor to live at his ease” (355)と自嘲気味に語る。Peter曰く、時計職人は、眼に支障をきたす。Peterは視力低下のために時計職人を引退し、Owenがその店を引き継いだことが語られている(357)。Owenも時計職人と視力の関係を、Peterから聞いていただろう。作品中、時間が“Father Time”と擬人化されているが、Peterの視力低下による職人引退が語られる直後には、“old blind Father Time”と表現されている。Peterの存在が老年による視力の低下を裏付ける。そのような師を見るにつけ、Owenは尚更、時間を意識したことだろう。

内側に向けられた時計は、Owenの時間、換言すれば自分の命に対する自覚を示しているのだ。Owenが修理した時計に施した装飾にも、当人が意図しているか定かではないが、Owenが持つ、命に関わる意識が反映されているようにも思われる。

If a family clock was instructed to him for repair, —one of those tall, ancient clocks that have grown nearly allied to human nature by measuring out the lifetime of a many generations, —he would take upon himself to arrange a dance or funeral procession of fig-

ures across its venerable face, representing twelve mirthful or melancholy hours. (357)

時計の装飾は陽と陰の二面性を有している。時計の文字盤に装飾された人形のダンスは陽の面、葬列は陰の面である。またこれらの装飾は生と死を連想させる。Owen は生だけでなく、それと不可分な死を強く意識しているということである。そして Owen は陰の側を生きている。Owen が蝶作りをしている場面が概して夜であることは、その証左と言える。とまれ、時計は自らの命の有限性を仄めかす。Owen にとって時計とは、死を意識させるものであったのかもしれない。視力の低下、不可避な死を意識する Owen にある種の焦りを感じているのだろう。強迫的に時間に追われている Owen は、多くの時計を自分の目に入るように配置しているのである。

3. 実用性と理想の美

本作品に関して芸術家と社会の対立が描かれているという指摘は、しばしばなされている。作品中、Owen が直面しなければならないのは、実用性という問題である。Owen は子供のころから美に対する自意識が強い。“It seemed, in fact, a new development of the love of the beautiful, such as might have made him a poet, a painter, or a sculptor, and which was as completely refined from all utilitarian coarseness as it could have been in either of the fine arts” (356)。Owen が求める美は実用性を削ぎ落したものであった。一方、親族たちは Owen の奇妙な才能が実用的な目的のために進んでいくことを願い、彼を時計職人にさせる (357)。また Robert によって蝶作りを中断される際、語り手は想像の中で育った概念は実用的なものとは接触すると破壊され、無力化されると述べている (360)。

Owen が作っている蝶は、Peter だけでなく、Robert, Annie にまで “plaything” と呼ばれている。彼らの視点から見ると、Owen の蝶が有する実用性は、玩具としてのものでしかないだろう。Owen は理想の美を

求める過程で、実用性と格闘しなければならないのだ²。それを最も象徴するのは Peter との争いである。Owen は Peter と会う時、心が震えないことはなかった (366)。それは Peter が持つ冷淡で想像力に欠ける知恵が、Owen の性質と相いれなかったためだ (361)。

Owen と Peter の確執は、*The Scarlet Letter* (1850) の序文である、“The Custom House” においても反復されている。

No aim, that I have ever cherished, would they recognize as laudable; no success of mine—if my life, beyond its domestic scope, had ever been brightened by success—would they deem otherwise than worthless, if not positively disgraceful. “What is he?” murmurs one gray shadow of my forefathers to the other. “A writer of story-books! What kind of a business in life, —what mode of glorifying God, or being serviceable to mankind in his day and generation, —may that be? Why, the degenerate fellow might as well have been a fiddler!” (“The Custom House” 12)

The Scarlet Letter にはピューリタン社会へのまなざしが込められているという指摘は数多なされている³。引用した箇所は、実用性という観点において注目すべきである。プロテスタント的な勤勉と合理主義から生じた近代資本主義において、つまり時間と労働が密接に結びついている現実世界において、作家という仕事は、実用性の低い労働だ。執筆活動の時間は、工場の労働のように賃金に比例していないのだ。先祖たちは、自分たちの一族から作家になるものがあることに驚き、呆れている。彼らにとって、作家は社会にとって役に立たない、実用性を持たない存在なのである。もちろんこれは“*The Custom House*” の語り手の主観でしかない。しかし、Hawthorne 自身の作家という職業への複雑な感情の表れでもあるはずだ。

議論を Owen に戻そう。Owen も “*The Custom House*” の語り手と同様に、Peter からの圧力を受けている。Peter の下に就いていた時、Owen

の異常な創造力（想像力）は抑えつけられていたが、Peter が仕事を辞した後、そこから解放される。その創造力と労働が一つに表現されたのが、前章で挙げた手の込んだ装飾が施された時計であろう。しかし、このような仕事に対する人々の反応は冷たい。“Several freaks of this kind quite destroyed the young watchmaker’s credit with that steady and matter-of-fact class of people who hold the opinion that time is not to be trifled with, whether considered as the medium of advancement and prosperity in this world or preparation for the next” (357) とある通り、時間を無駄にしていると見なされているのだ。すでに述べた通り、19世紀初頭、労働と時計が密接な関係を持ち始め、労働時間が商品として、賃金と交換されるようになり始める。そのような世界において、換言すれば利潤追求が目的化された世界において、時間の浪費は悪しき行為なのだ。前章で内側に向けられた時計を論じた際、時計が自らの実用性を拒絶するかのようであると述べたが、もちろん、時計を内側に向けたのは Owen だ。これは実用性と時間を重んじる世界への反発のようなものを象徴していると考えられる。しかしながら、Owen は働かなければならない。実用性のある労働をして、賃金を稼がなければならないのだ。Owen はこの点においても現実世界から離れて生きてはいけない。

本作品の根底に経済的な問題があるのは間違いない。それを踏まえ、次の箇所注目したい。“The decease of a relative had put him [Owen] in possession of a small inheritance” (364)。これは Peter が Annie と Robert の結婚を知らせたことによって蝶作りが妨げられた後、失意の底にある Owen に起きる出来事だ。引用にある通り、親族の遺産が手に入り、Owen は働く必要がなくなり、酒浸りの状態になる。本作品において、Owen がする行動は、(時計職人としての)仕事か、蝶作りの作業がほとんどである。自らの命の有限性を知っている Owen にとって、酒を飲み、怠惰に過ごすことは、完全なる時間の無駄使いであろう。それは現実逃避であり、時間の浪費なのである。

さて、遺産を相続するという設定はどのような役割を果たしているのだら

うか。ここで重要なのは、Owen が働く必要がなくなった点である。逆に言えば、Owen はそれまでは嫌々ながらも、時計職人として働かなくてはならなかったということである。Owen にも Peter にも Robert にも職業が設定されている。Peter は仕事を引退しているが、Owen と Robert はまだ現役である。前述した通り、Owen は町の時計を修理し、好評を得ている。Robert は依頼された鉄床をもって Owen の店を訪れている。これらの労働には、もちろん賃金が発生していたことだろう。遺産を得た Owen は労働から解放され、実的なものに携わる必要がなくなり、蝶作りへと没頭していく。

Owen が手にした金が遺産であるということを本論の文脈で捉えようと、指摘しなければならない点が二点ある。一点目は、Owen が得た金が結局のところ、労働に拠っていないことだ。本章の冒頭で述べた通り、Owen の親族は Owen の能力を実用的な方向に向かわせようとした。しかしながら、それは Owen が遺産を得た瞬間、失敗に終わる。Owen は実的な労働をし、賃金を得たわけではなく、言わば魔法のごとく湧いてきた金を獲得するのである。もう一点は遺産である以上、それが誰かの死によって生じたものだという点である。自らの命の有限性、つまり死に達するまでの時間を意識している Owen が、死から生じる金によって働く必要がなくなるのだ。そして、その金で酒を飲み、時間を浪費する。Owen 自身はその金が遺産であるという点について、何の反応も示さない。本論の一章において、Owen の蝶は何がしかの物質を介してしか可視化できないこと、自然の中の美を機械仕掛けの蝶で表現することの矛盾を指摘したが、この遺産についても Owen のある種の盲目性が孕んでいることは明らかだろう。遺産が死から生まれた金であること、その金で自らの時間を浪費していることに、Owen は気付いていないのだ。

働く必要もなく、美の制作に集中できる Owen の状態は、芸術家にとっての一種の理想の状態だろう。遺産を相続する点はある意味でかなり現実的だが、これは作者を願望の顕れと読むこともできる。Hawthorne は 1842 年に Sophia と結婚し、旧牧師館で暮らし始める。1844 年 3 月 3 日には長

女 Una が生まれている。Newman に拠れば、Hawthorne が本作品を執筆していたのは1844年3月12日から5月3日である(21)。つまり、Una が誕生して間もない頃に本作品を執筆し始めているということである。一度流産を経験しているHawthorneとSophiaにとって、Unaの存在は大きな幸せをもたらしたことは想像に難しくない。しかしながら、それは同時に大きな不安となったことだろう。Hawthorneにとって経済的な問題は心配の種であったに違いない。ボストンの税関で働いていた時と比べれば、収入となる原稿料は微々たるものである。確かに経済的な問題は、Unaが生まれる前から、Hawthorneを悩ませていた。1843年3月25日付のHoratio Bridgeへの手紙には、次のような記述がある。

I returned from my visit to Salem on Wednesday last. My wife went with me as far as Boston. I did not come to see you, because I was very short of cash—having been disappointed in money that I had expected from three or four sources. My difficulties of this sort sometimes make me sigh for the regular monthly payments at the Custom House” (*The Letters, 1813-1843* 681)

そして、Hawthorneが収入を得るためにできる作家としての労働は、一般的な労働とは異質のものだ。労働時間が収入と比例している社会にあって、Hawthorneはいつ終わるとも分からない執筆活動で生計を立てようとしているのだから。それはOwenの蝶作りと重なり合う。HawthorneはBridgeに宛てた手紙の一年後、1844年3月24日付のG. S. Hillardへの手紙に、新たな家族ができたことへの喜びを綴っている。しかし、同時に、当時直面していた現実も吐露している。“I find it is a very sober and serious kind of happiness that springs from the birth of a child. [. . .]. It will never do for me to continue merely a writer of stories for the magazines—the most unprofitable business in the world; [. . .]” (*The Letters, 1843-1853* 22-23)。娘が生まれてから、経済的な問題はより一層、

Hawthorne を悩ませていたことは想像に難しくない。

Hawthorne の現実とは異なって、Owen が遺産を手に入れることは、労働、つまり現実の問題から解放されることを意味する。労働が Owen と社会を繋いでいたとすれば、遺産は Owen と社会を切り離す役割を担っているのだ。Hawthorne は Owen という理想の芸術家像を描くため、社会から切り離すべく、親族の遺産という幸運な外的要因を用いたのだ。遺産を手に入れることは現実的な出来事である一方で、芸術家として理想の状態を生み出す大きな要因なのである。Owen が美へと達することができるほどの高みへと昇って行く過程に、経済的な問題からの解放があったことは忘れてはならない。そこには、Hawthorne が直面していた現実が反映されているのである。

結 び に

このように、本作品には Hawthorne 自身が持つ、作家という職業に対する考えが多分に反映されているように思われる。作家として、自然の中に存在する美を作品という形で具現化しようとしていると言え、聞こえは良い。しかしながら、経済的な問題からは逃れられない。前述した、*The American Notebooks* の 1844 年 7 月 27 日の記述は、次のように続く。“It tells a story of busy men, citizens, from the hot street, who have come to spend a day in a country village; men of business; in short of all unquietness; and no wonder that it gives such a startling shriek, since it brings the noisy world into the midst of our slumberous peace” (TAN 248-49)。蒸気機関の音は町の物語を森へともたらず。Hawthorne にとって、それは気持ちの良いものではなかった。なぜなら町の騒々しさに森の静寂が破られるからである。町の騒々しさと Hawthorne が書いたものは、忙しい市民、労働に追われる人々の物語が含まれている。彼らは Hawthorne とは違い、労働時間を商品として売っている。このような現実世界が森の中まで Hawthorne を追いかけてくるのである。労働から解放され、美へと達

するほどの高みに昇った Owen は、Hawthorne が描く理想の芸術家の生き方であったと言える。しかし、蒸気機関に乗りこみ、旧牧師館の近くの森にまで響きわたる町の物語は、Hawthorne に作家である自分が持ち得る実用性について考えさせたことだろう。

“The Artist of the Beautiful” は 1844 年に執筆された。Hawthorne は 1845 年に旧牧師館を出ていき、翌 1846 年 4 月から税関で勤め始める。皮肉にも、Owen という理想の芸術家像を描きながらも、数年後の作者の姿はそれとは大きく異なったものになるのであった。Hawthorne は “The Artist of the Beautiful” の中に芸術家の理想像を描きたかったのだろうか。寧ろ Owen は、Hawthorne が感じていた作家という職業への不安が具現化された人物なのではないか。理想の芸術家 Owen の背後に、現実と直面し、ジレンマを抱える芸術家 Hawthorne の姿が浮かび上がってくる。

註

¹ Hawthorne は 1829 年に New Haven を旅行しており、この時計を目にしていた可能性は十分にあるだろう。

² Lea Bertani Vozar Newman が論じている通り、Owen と実用的なものとの関係には、Hawthorne 自身が投影されていると言える (25)。

³ 例えば青山義孝は *The Scarlett Letter* における苦行に着目し、Hawthorne の宗教観の一端を明らかにしている。

参考文献

Fogle, Richard Hater. “The Artist of the Beautiful.” *Hawthorne: A Collection of Critical Essays*. Ed. A. N. Kaul. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 1966. 99-110. Print.

Gargano, James W. “Hawthorne’s “The Artist of the Beautiful.” *American Literature* 35(1963) : 225-30. Print.

Gilmore, Michael T. *American Romanticism and the Marketplace*. Chicago : U of Chicago P, 1985. Print.

Hawthorne, Nathaniel. *The American Notebooks*. Vol.VIII of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. Claude M. Simpson. Columbus : Ohio State UP, 1972. Print.

———. “The Artist of the Beautiful.” 1844. *Mosses from an Old Manse*. Ed.

- Mary Oliver. New York : The Modern Library, 2003. 354-76. Print.
- . “The Custom-House.” 1850. *The Scarlet Letter and Other Writings*. Ed. Leland S. Person. New York : Norton, 2005. 7-35. Print.
- . *The Letters, 1813-1843*. Vol.XV of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. Thomas Woodson, L. Neal Smith, and Norman Holmes Pearson. Columbus : Ohio State UP, 1984. Print.
- . *The Letters, 1843-1853*. Vol.XVI of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. Thomas Woodson, L. Neal Smith, and Norman Holmes Pearson. Columbus : Ohio State UP, 1984. Print.
- . “The Old Manse.” 1846. *Mosses from an Old Manse*. Ed. Mary Oliver. New York : The Modern Library, 2003. 3-27. Print.
- Marx, Leo. *The Machine in the Garden : Technology and the Pastoral Ideal in America*. New York : Oxford UP, 1964. Print.
- Newman, Lea Bertani Vozar. “The Artist of the Beautiful.” *A Reader’s Guide to the Short Stories of Nathaniel Hawthorne*. Boston : G. K. Hall, 1979. 19-27. Print.
- O’Malley, Michael. *Keeping Watch : A History of American Time*. 1990. Washington : Smithsonian Institution Press, 1996. Print.
- Stewart, Randall. *Nathaniel Hawthorne : A Biography*. New Haven : Yale UP, 1948. Print.
- Turner, Arlin. *Nathaniel Hawthorne : A Biography*. New York : Oxford UP, 1980. Print.
- 青山義孝. 「ホーソンとキリスト教——『緋文字』における苦行と悔い改め」. 『アメリカの嘆き——米文学史の中のピューリタニズム』. 東京 : 松柏社, 1999. 137-56. Print.
- 松尾裕美子. 「時計を巡る一考察——「美の芸術家」における時間と近代科学の意識」. 『ロマンスの迷宮——ホーソンに迫る 15 のまなざし』. 日本ナサニエル・ホーソン協会九州支部研究会編. 東京 : 英宝社, 2013. 157-74. Print.
- 鷺津浩子. 『時の娘たち』. 東京 : 南雲堂, 2005. Print.